

八廿 周茂叔か愛蓮

九十二 淵明か東籬の菊を愛する辨

は世出世とも有縁無縁其差なきよあらず◎古宋朝に周茂叔と云ものあり晩年に廬山のふもとに隱居せり其ところよ清潔なる溪あり其ほとりに書堂をつくりて濂溪と名く廉の字廉直なる故を以て廉溪と書とも清潔の水をそへて濂溪と云なり爰を以て茂叔を濂溪先生と云なりときよ茂叔濂溪よ蓮を植て常よ愛せり但し世人の花月等を愛せらるゝとは其意ろ別なり謂く蓮は泥中よりいで、然も游泥よ不染清蓮と小波の清に洗て餘花とちがふて媚はけくしからず中はうつほよして竅通外は眞直よしてつよ又藤葛なんどのごとく蔓なくはひまつゐると云ともなく又枝と云ともなく直よ立て香の清して遠熏す故に遠よりして見て馴もてあそぶべきものにあらず皆是れ君子の徳をそなへたる花よあらずやと云て偏よ蓮花を愛せるなり◎又晋の陶淵明は水陸草木の中よ面白花のはなれた多しといへども菊は花の中の隱逸な

十三 蘇晋が彌勒佛敬重の説

一十三 彌陀と此土の衆生有縁の現證

るものなりとて偏よ愛せり其の故に餘花は春陽の氣をうけて萬花と争開於中菊は諸花と榮花を同せず時よをくれて九月に霜露の冷氣を凌て獨開の花の隱者なるものなり已れが意よかなへるを以て別て是を愛するなり又唐朝よは世人多くをこりて富貴を以て専らとせり故よ牡丹を偏に愛せるなり其意に牡丹は諸花の中にいかにも外をかざりて奢たる花たるを以なり已上古 文眞實此れ皆な已れ已れが愛するところなり是れ即ち有縁よりをこらずして何ぞや◎いにしへ蘇晋と云ものあり常に佛道を學せり胡僧あり彌勒佛の像を繪し繡たるを得させたりけるよ晋是を得て寶とし敬へり曰く此佛の酒を飲事をこのめり正よ吾が性と相合せり爰を以我は他佛を愛せざるなりとて常よ市中に行て酒を飲猪を食ふなり然とも其意を世人更に知ざるなり世説 に出◎世間出世間とも皆有無縁愛不愛の差別あり阿彌陀如來よをいて何を愛縁の衆

生なからんや其中よをいて娑婆の衆生と其因縁はなれた以深澄  
 嘆の云問諸佛化導平等何故彌陀編接娑婆答諸佛化導雖等不妨各  
 有因緣故世人至嗟歎之時亦稱阿彌陀佛有緣之驗於是顯矣然我  
 等衆生の有緣の佛とは西方極樂淨土の教主阿彌陀如來是なり故  
 に行よも住するにも坐するよも臥するよも教主阿彌陀如來の御  
 方をうむかす又涕唾及ひ大小便利よいたるまで西方よ向ふて行  
 事なかれとなりたとへば衆の一星ごとく北よ拱てうやまふ  
 なり其故は衆星の王北天よまします故なり何に況や彌陀は十劫  
 已前のむかしより十方衆生のために縁をむひて我が淨土に引入  
 せんとの誓願あり今すでよ誓願成就して淨土よまします何ぞ此  
 の有緣の聖人に尊重恭敬の心をなさざらんやと云云○二には有  
 緣の像教を敬まふ像とは彌陀の像なり此像よ多種あり或は繪像  
 木像或は繪にぬひ或は金銀等を以鑄等を云なり然るに諸佛の色

二冊 有緣の像教

像尊ざるよはあらずといへとも彌陀は是我等がためよ有緣の像  
 ありと云て別て尊重せよとなり教とは淨土の三部なり如來一代  
 所說の中よ彌陀の教觀を説るの經はなはた多しといへとも其中  
 にをいて因明直辨の二つあり自餘の諸經に因明の說と云て諸善  
 萬行を説とよに一往念佛相應の機あるときか或は下根最劣にし  
 て上智の行法に及ばざるときには因に彌陀の法門を明すを因明  
 の說と云なりさて淨土の三部經に直に彌陀本願のことりを辨  
 ず縱令餘行を説事ありといへとも是れ亦念佛門のためには因明  
 といはるゝなり故に念佛の行者たらんものは諸經の中の内淨土  
 の三部經を以五色の帛をつくり是をいれて自も讀み他よをしへ  
 ても讀しめよ又此經像をは淨室をつくりて掃灑して高きところ  
 をまうけて安置せよとなり此れ即恭敬の相なり三には有緣の善  
 知識をうやまふ謂く善知識とは三種ある中よ教授の善知識をさ

●三〇種  
●一別相體  
●一住持三寶  
●一四種  
●一化相體  
●一住持三寶

すなり教授といへ聖人の語言をうけ傳へて教へさづくるを云なり  
故に教授の善知識といへ總じて聖道淨土の教ををしゆるを云なり  
但し今は淨土の教をのぶる善知識を云なり此の善知識にをいて  
千由旬十由旬已來に並に敬重し親近し供養すべきとなり然り  
といへとも聖道異別の學人たりと云ふもすべて恭敬の心をこ  
せ若し聖道異解の僧なりと云て輕慢を生ずれば罪をうる事きはま  
りなきなり此ときは還て往生淨土のさはりとなる故なり四は  
同縁の伴をうやまふ謂く念佛同修業の者を云なり其故に凡夫の  
ならひ動見聞覺知はひかれて獨業成するをかたし必ず良友によ  
つて自も信よもとづき他も亦己が行法にたすけられて信に住し  
て往生の業を成するなり故に互に行業を相たすくるなりよつて  
同伴の善縁にをいて深く相ひ保任し敬重せよとなり五は三寶  
をうやまふなり謂く三寶といへ佛法僧の三つなり三寶の名義繁多

三十三 住持の三寶の  
名義

●貴已等佛とは  
佛何ものぞ我何ものぞ  
豈に佛に劣らんやと己  
を貴て佛に等しくする  
の慢心を云ふ

よして一途に沙汰しがたし其の品數に三種四種の別あり何れも  
ことごとく敬ふべし今爰に具にしるすよあたはず淺行の者の依  
り修すべきにあらす今淺識の人のためよ便となるどころの住持  
の三寶を擧て料簡す◎一は佛寶とは謂く檀にきさみ綺よえがさ  
石にわり土をよぎりて佛像となして敬重するなり此靈像にをい  
てしはらくなりとも拜み奉まつるときは罪障を滅し福善を増長  
せるなり若少しなりとも慢心を生じて貴已等佛の見ををこすか  
又は是はあれ本と土木金石など云ときは惡をまじ善をほろ  
ぼすなり唯此尊容ををへば眞佛を見ると全く同一なるものな  
り二に法寶とは如來の所說黃卷赤軸をさして云なり若此經を讀  
誦し書寫し傳布し思惟するときは能く解縁を生ずるなり故に經  
卷よをいて嚴敬すべきとなり三に僧寶といへ一切の有戒無戒持戒  
破戒の僧をさすなり謂佛あり法ありと云とも僧あつて解説し教

導せずんば凡夫人の因縁とならず故に僧寶にをいては最敬重すべきなり問第一の有縁の聖人は是れ佛寶なり第二の有縁の像教は佛寶と及び法寶なり第三の有縁の善知識は僧寶なり今何う重ねて恭敬三寶と云や答ふ上は別して淨教有縁の三寶を擧今は總じて一切三寶を擧ぐるなり總別並擧故に繁重の咎なきなり問ふ此義猶以てあきらかならず爰に四修の行法を明こと元是れ純一西方のためなり何そ一切三寶を恭敬尊重せよとす、ひるや答三寶は是れ万善のもと、するところ人天の憑ところなり故に總してあぐるなり然れども淨土門の行人一切三寶を敬重すといへども身口に正く行ずるときは念佛往生の一願一行なりと信す故に此外口傳ありつるは是れ淨土の三寶に歸するなり ◎三に無間修とは古來一家の意ろ二義よつて釋せり一に常に彌陀を信して恭敬禮拜稱名讚歎廻向發願等にいたるまで心々相續して毛髮か

四卅 無間修の二義

●胸襟のにの三字のにの

りも胸襟のに餘業を以て來し間雜せざるを無間修と云なり此ときの間のまじゆると訓するなり一に心々相續して二六時中念佛せしむる行人に貪瞋煩惱を以て間隔する事あたはし若煩惱來りて念佛の心を隨したひ犯す事ありといへども其日の中其時の中に隨て懺悔して餘念更に來てへたてとなるをなし故に無間修と云なり此ときは間はへだつると訓するなり然し懺悔のやう自力門のごときんば後時等よいたる理もありといへども今は他力に乗じて念念稱名常懺悔の法なればあやまつて不圖餘念生ずといへども早や舌の下より行住坐臥の稱名をこるなり故に餘犯來て隔となるべきやうなし是を隨犯隨懺不隔念隔時隔日常使清淨亦名無間修と云なり四に無餘修とは謂く十方淨土の中よの専ら西方極樂の一土をもとめ諸佛多しといへども彌陀一佛を禮念し諸佛万善の行業區々たりといへども悉くすて、行せず唯ひとへし西

方彌陀の一願一行にもとづくを云なり問ふ無間修の初の義と何れの差別あるや答ふ無間修には同斷心をきらふて念佛相讀の行をす、ひ今は唯雜起心をきらふて念佛の正行をす、ひ勸進するところすぞ別なり故に二修の分ちあるなり 已上三心四修 ○二一能攝

語

みな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふうちにより候なり

今能攝と云事は決定の深信に住して他一頭をめぐらさずひとへに彌陀一佛に歸依して南無阿彌陀佛となふる中に三心も四修も五念も三種行儀等もことごとくこもるなり故に皆決と云なり皆決と言ハ三心四修にかぎるやうに見ゆれども總して純西方の諸正行をこめて皆と云なり決定は正しく是れ上の唯往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申す等の淨土眞實の行法をさすの詞を

五念  
三行儀  
三種行儀

五十三  
心横堅二種の三

り◎於中三心即ち南無阿彌陀佛と申す中よこもれると云といか  
が心得わくべき事に候や謂く三心一横の三心堅の三心とて二種  
の別あり横の三心とハ一心即三心と云て彌陀佛に歸依する眞實  
の一心のところ即三心を具足するなり此ときは三心の間何れ  
を先とし何れを後とするの差なく旋火輪のごとく又伊字の三  
點のごとし是れは第十八の願文の意なり堅の三心とハ機多類  
あるによつて虚假心の病あるものよは至誠心の薬を以て治し疑  
心の病ある者には深心の薬をほこして療し不廻向の病ある者  
よは廻向心の薬をあたへていやすがごとしみな是れ病に應じて  
薬をほこし玉ふなり例せば佛け壇守よは不淨觀ををしへて道  
果を證せしめ常に爐舖を以金器の巧をなす者よは數息觀ををし  
へて道果を得せしめ玉へるがごとしとなり是は觀經所説のこゝ  
ろなり然りといへども横と云ひ堅と云ひ少異なるよ似たれども

●論主とは  
往生論主天親菩薩也

六十三  
三心俱起の義  
辨

●一の心所なり  
此語いふにや

實は是れ同時俱起の法にして差別なきなり故に三心すべて一心  
と云なり小經の一心不乱論主の我一心正しく此の意なり◎又三心  
に俱起の法と云と俱舍論のころより依るに至誠心と深心と云の  
四十六の心所と云中に大善地法と云ふあり此十は常に善法を  
をこすを云なり此中に至誠心と深心とはある故に善心生ずると  
きは同時俱起する心所なり故に此心をこるには前後なきなり  
さて廻向心は欲の心所なり此の欲の心所の大地法と云ふ中にあ  
り大地法のころころの心所をこるときに何れの心とも同時  
よをこるなり故に三心の同時にして一の心所なり然は即  
ち三心は一つの善心をこつて彌陀に歸して決定眞實の信樂あ  
つて南無阿彌陀佛と申すうちに籠り候なりとの玉へるなり一家  
善導の釋に云く必須決定眞實心中至誠 廻向願作得生想廻向 此心  
深信由若金剛不爲一切異見異學乃至所動亂破壞深 此ころを以

語

て思ふに三心の一心信樂して念佛を申す中攝在せり又四修と  
申すも南無阿彌陀佛の中にもあるなり一家の釋に云一心專念  
彌陀名號是は雜念に對す  
即ち無餘修なり 行住坐臥不問時節久近念々不捨者無間修 是  
名正定之業願彼佛願故恭敬修 長時の上の三修は通用して具せり  
是即ち決定往生南無阿彌陀佛の中に籠ると申すなり已上  
○三には正しく起請文の誓詞を出すに二つ一には結前生後二は  
は立誓  
○初に結前生後

此外に奥ふかき事とぞんぜは

前より玉へるところの單信無二の口稱念佛を以て往生淨土  
を願求せるなり是より別異路なきなり爰を以て彌陀の本願を  
たて、至心信樂等とす、玉へり釋迦は是を出世の本懷なりと

●此外と云  
外の字刺歟

語

説玉ひ六方恒沙の諸佛は爰にをいて舌相壞爛の證誠あり三佛の  
内證皆な是れ念佛の一行なり三國の祖師是を宗要とす、めりこ  
こをさして此外と云正く是れ結前の詞はなり奥深等は下を呼よを  
こす生後のことばなり ○次に正く誓詞を立るなり

一尊のあはれみにはつれ本願にもれ候べ  
し

空上人のの玉はく我す、むるところ更に私にはからふまあらず  
唯彌陀の本願にまかせ釋迦の教にしたがひ十方恒沙の諸佛の證  
誠より又道綽善導の釋義を依用とせり爰を以て上人まことよ  
佛陀にまかせて誓て一尊のあはれみにはつれ玉はん等との玉へ  
るなり二尊とは釋迦如來と六方の諸佛となり本願とい正く彌陀  
に誓ふの詞也本願とい何れの願をさすぞと云に總じては四十八

●一尊を  
釋尊と諸佛とせられし  
は下よ本願とあるは  
彌陀佛なれば三佛に  
配せんとの意なるべし  
されど釋迦彌陀二佛と  
見る方よきには非ずや

願をさし別して第十八の願をさすなりと云

一枚起請文鼓吹卷第四終

一枚起請文鼓吹卷第五

○後一流通分一五つ○一には信念佛の人を出し二に智解を遮す三に正機を示し四に正く遮智をしめし五に正く結して勸進し玉へり○一は正く念佛を信する人を擧

語

念佛と信ぜん人は

◎凡そ念佛と云に四種あり一は稱名念佛なり謂く阿彌陀佛の名號をとなへて二六時中が間一心專注にして日々に或は一万聲或は二万聲乃至十万聲如是なる事歲月すて久き則んは念々不斷して純一無雜の心なるときは命終のときよのぞんで定て阿彌陀如來及一切聖衆の來迎にあづかりて必ず極樂世界に往生する事を得なり二は觀像の念佛なり是は道場をしつらひ阿彌陀佛の形像を安じて佛の形像相好等を觀じて口は佛名を唱ふると

一四種念佛



きは即ち心ろ散乱せざるなり心ろ散乱せざるべきハ本性の佛体  
したがつて顯現す如是なるときは念々不斷にして純一無雜なれ  
ハ命終のときよのぞんで定めて彼の佛け身を現して迎接し玉へ  
る事を見て決して極樂世界に往生する事を得なり三ハ觀想念  
佛なり謂く端坐正念にして面を西方に向て心ハ妙觀をなして或  
は阿彌陀佛の眉間白毫相の光り乃至足下の千輻輪相にいたるま  
で一々展轉して是を觀するなり觀相すぞに純熟して三昧現前す  
れば命終のときにのぞんで決定して極樂淨土に往生する事を得  
なり四ハ實相念佛なり謂く阿彌陀佛の法性身を念ずれば即ち  
實相の理を得なり此理をうるときは形もなく相もなく猶し虚空  
のぞとし此住位には心及び衆生本來平等なり如是念は即ち是れ  
眞念なり此の眞念相續して三昧現前すれば決定して極樂世界に  
往生する事を得なり

已上普賢行願記の意

今所勸の念佛ハ四種の中には何れ

●たどひ一代云

以下の文の意は本願の念佛は無解信願の稱名なればよしや學解あるものたりとも凡處の信願工夫を加へず平に信じてやすらかに念佛せよとの仰せなりしとすよはあらず

語

ぞと云に第一の稱名念佛にあたる歟但し分別あるべし餘の三種の念佛ハ上にすぞに簡遮し玉へる觀念等の念佛にして佛け非本願の行体なる故に今ま正く善導大師の妙釋第十八願の十聲唱佛の口稱念佛を信せよとなり○二ハ智解を遮す

たどひ一代の法をよくく學すとも一文  
不知の愚鈍の身よなして

いはゆる正法すぞに過像法はやくをはりて末法の今にいたる故に世もくだり人亦つたなくして學解廣博の人あるも更になしたましく少見少聞の者ありといへどもつるには陵遲せるといへり云こゝろハ末法に智解學道をなすあり一日世人とは一重堆すぐれて見ゆれども歷縁對境よさゑられて所解の法こどくくをこたりて衆人と一同にしてかゝる事なしたとへハ平々たる原野に

二 善星比丘墮  
獄因縁

●四禪定とは  
初禪定乃至第四禪定に  
して色界四禪天のもの  
を得る所なりたゞ此  
身は欲界にありたゞ欲  
界の煩惱を断すれば此  
定を得るなり

●一闍提とは  
信不見と譯す、出離生  
死の見込なき極惡見の  
徒を云ふ也

●底極斯下の人  
とは

●十二部とは  
十二部經を云ふ

遲丘塚のやうなあつて自餘より高く見ゆれども風にうたれ雨に  
まがれてつるまの陵夷として平地となり平地とかへるをなき  
に似たる者といへり故に爰を以て末法濁乱に眞實に一代藏經  
を學得する者なしよつて縱使と云て假の言はを置玉へるなり若  
し又た上世を以て一代經を學すと云ども一心に決定せずんば  
其證をなしからん◎佛在のときは迦葉菩薩佛に白して言さく善  
星比丘は是れ佛の菩薩にてまじしときの子なり瞿夷女の養  
をたてられしなり羅睺羅のためは兄なり出家して廣く如來一  
代の所説を受持し讀誦し分別し解説せり故に欲界の煩惱を斷壞  
して四禪定を獲得せり然に今如來何として未來記して善星は是  
れ一闍提なり底極斯下の人なり地獄に住して化度すべからざ  
る人なりと説玉へるや佛の玉はく善星は一代十二部を讀誦し  
學解すといへども眞實の心に住せず其の心邪見なるが故なり其

●薄拘羅鬼とは  
或る鬼神の名なるべし

故に或るとき佛け王舍城にまじりて帝釋天のために説法し玉へ  
るよ其とき善星比丘我に給使せりすその初夜より後夜よいたる  
善星睡眠ををかされて惡念をなして我をたばかりて云王舍城よ  
童男童女あつて啼て止ざるときは父母威して云汝若し啼事止す  
んば汝を以て薄拘羅鬼よ付べしと云善星此事を眞實なりと執し  
て我にかたりて云如來はやく禪室に入て御寢なり玉へ爾らすん  
は夜もすでに深更に及ぶ將薄拘羅鬼出て來るべしと云ふ如來  
是を聞ての玉はく痴人善汝聞ざるや佛は是れ恐畏するところな  
しと如是如來の玉へども更に信受せず居たる者なり又或るとき  
佛け迦尸國の尸婆富羅城よまじりしに善星佛けよ給使せり其  
とき如來彼の城中に入て乞食せんと欲し玉ふに無量の衆生渴仰  
して我が跡を見んとす其とき善星比丘も我が跡にありしが諸人  
の渴仰を滅して不善心を生せしむるなりさて如來彼の城に入て

●尼乾志とは  
遊羅門中一種の行者なり

●十二分教とは  
十二部經の事也舊譯に  
十二分教と云ふ  
三 一代所説の字

酒家<sup>しゅか</sup>をいて一りの尼乾志<sup>にけんし</sup>を見玉ふに脊<sup>せまか</sup>をくゞめて地にうづく  
まり酒の糟<sup>さう</sup>を食ふあり善星見<sup>ぜんせいけん</sup>をはりて云ふ世尊世間<sup>せそんせけん</sup>にをいて若  
し阿羅漢<sup>あらかん</sup>と云ふのあらはは是人尤もすぐれたりと何を以の故<sup>ゆゑ</sup>此  
人の所説<sup>しよせつ</sup>因もなく宗もなしといへり如來の玉<sup>たま</sup>はく痴人<sup>ちじん</sup>星<sup>せい</sup>汝聞<sup>にょもん</sup>  
ざるや阿羅漢<sup>あらかん</sup>は是れ酒を飲<sup>のみ</sup>す人を殺<sup>ころ</sup>せす妄語<sup>まがことば</sup>せず偷盜<sup>ちゆうたう</sup>せず姪<sup>い</sup>  
佚<sup>い</sup>せざるなり是の人は是れ父母を殺<sup>ころ</sup>し酒糟<sup>しゅさう</sup>を食<sup>く</sup>ふ云何阿羅漢<sup>いかんあらかん</sup>と  
云<sup>い</sup>ふを得んや是人は必ず身をすて、阿鼻地獄<sup>あびぢやく</sup>に墮<sup>お</sup>在<sup>ざい</sup>すべしと如  
是如來の玉<sup>たま</sup>へとも善星<sup>ぜんせい</sup>すべて信受<sup>しんじゆ</sup>の心なきなりつゝめには善星如  
是惡計<sup>あくけい</sup>を以ての故に生ながら阿鼻地獄<sup>あびぢやく</sup>に墮<sup>お</sup>入<sup>にゅう</sup>せるとなり 具には 涅槃經  
三十 首經<sup>しゆけい</sup>云善星妄說<sup>ぜんせいまうせつ</sup>一切法空<sup>いっせつぽうくう</sup>陷入阿鼻地獄<sup>いっせつぽうくう</sup>矣佛在世にすら如  
是十二分教<sup>じふにぶんけう</sup>を讀得學<sup>よみえがまか</sup>ひ解<sup>と</sup>すといへとも一心の作用<sup>いっしん</sup>よからざると  
きは惡趣<sup>あくしゆ</sup>の業をまぬかれす今唯末法<sup>いみ</sup>なり假<sup>かり</sup>にも學<sup>まな</sup>する者あら  
んや故<sup>ゆゑ</sup>縦令<sup>たゞし</sup>と云なり◎一代とは代々<sup>たいてい</sup>なり又た世<sup>よ</sup>なり古今

四 還愚癡の辨述

●四惡趣とは  
地獄 餓鬼 畜生 無趣

韻會<sup>いんかい</sup>に云一代<sup>いちだい</sup>爲一世<sup>いっせい</sup>説文<sup>せつぶん</sup>三十年爲一世<sup>いっせい</sup>故<sup>ゆゑ</sup>一代とは義を以三十年  
を立て一代とすといへり然とも必ず三十年を取て一代とするに  
あらず代は更<sup>か</sup>なりと字註<sup>じぢゆ</sup>してかはると訓<sup>しん</sup>す唯是れ釋迦<sup>しやくぢあ</sup>如來<sup>にょらい</sup>御生<sup>ごせい</sup>  
涯<sup>えん</sup>の間をさして一代と云なりと天台輔行<sup>たいたいほけい</sup>の中<sup>なか</sup>にかけり然るとき  
は始め華嚴<sup>けわげん</sup>より終法華<sup>しゆぽうわ</sup>涅槃<sup>ねはん</sup>にいたるの間<sup>ま</sup>に説<sup>せつ</sup>き玉<sup>たま</sup>へる五十年の  
御法<sup>ごぽう</sup>をさして云なり◎一文不知<sup>いちぶんちぢく</sup>の愚鈍<sup>ぐどん</sup>の身<sup>み</sup>をなしてといは是れ還  
愚癡<sup>ぐぢ</sup>をしめすなり祖師<sup>そし</sup>云聖道門<sup>せいどうもん</sup>意極<sup>いごく</sup>智慧<sup>ぢゐ</sup>離生<sup>りせい</sup>死淨土門<sup>しじゆんじゆもん</sup>意還<sup>いぜん</sup>愚癡<sup>ぐぢ</sup>  
生極樂<sup>じやくらく</sup>矣<sup>い</sup>されは聖道門<sup>せいどうもん</sup>のこゝろ若し小乘<sup>せうじやう</sup>よらは破見惑<sup>はけんわく</sup>故離<sup>り</sup>  
四惡趣<sup>しやくおしゆ</sup>破思惑<sup>はしゆわく</sup>故離<sup>り</sup>三界<sup>さんがい</sup>と云て見惑<sup>けんわく</sup>思惑<sup>しゆわく</sup>の煩惱<sup>ぼんごう</sup>を破斷<sup>はだん</sup>して三界  
六道<sup>りくだう</sup>の生をまぬゑると云ふ其見惑<sup>けんわく</sup>の惑<sup>わく</sup>を斷<sup>だん</sup>する事<sup>こと</sup>智解<sup>ぢげん</sup>學了<sup>がくじやう</sup>のな  
すところなり若し又た大乘<sup>だいじやう</sup>のこゝろからは十信<sup>じゆしん</sup>十住<sup>じゆじゆ</sup>十行<sup>じゆじやう</sup>十廻向<sup>じゆくわう</sup>  
及び十地<sup>じゆぢ</sup>等覺<sup>とうかく</sup>の階級<sup>かいかい</sup>を立て、一一の位<sup>ゐ</sup>をいて無數劫<sup>むすぶせつ</sup>を経て漸  
く妙覺<sup>めうかく</sup>の田地<sup>ぢぢ</sup>にいたると云ふ如是階位<sup>かいかい</sup>を経て諸惑<sup>しよわく</sup>を伏<sup>ふく</sup>し又斷<sup>だん</sup>す

二百一  
るに皆な是れ學解の智をめぐらす事なり此等は是れ智慧をさし  
めて三界をはなれて無漏涅槃の地にいたると云なり若し至極大  
乗の頓機あつて地位の諸階にわたらず立地に悟入するあり此説  
ありといへども還機修行するときは皆な智解のわざなりさて淨  
土門の意は元より蒙昧迷惑の衆生なるときは彌陀本願の正機を  
り若し又九年來所學の智慧ありと云ども往生極樂のためは一  
つも用ゝ立つ事なし故よすて、用いず愚痴の凡夫にかへりて本  
願をたのみ念佛を申して往生極樂の大素懷を遂よとなり故に三  
國の論師及び大智廣博の諸祖念佛門に入り玉ふ事みな私の智慧  
を出さず唯佛願に乗じて念佛を申して往生し玉へるなり問ふ祖  
師の語に聖道門の智慧をさしはめて生死を離るゝと云事聊不審あ  
り謂く聖道門の意も智慧は是れ入聖のさへりなりといへりされ  
は至極のときは天台には智遠成妄といはれ傳教大師の三諦是

六識とは  
●六識とは  
意身舌身耳身

語

五 尼入道の判語

れ禍門といへり又宗鏡録には智と了と唯一なり一にして而俱  
妄なりといへり此義いかんぞや答是に始終の分別あり謂く聖道  
門始の智慧をさしはめて能入せるは正しく所入證悟の堂々よ能解  
の智慧を忘卻しつるなり淨土門の心ろは始より解了智慧のは  
たらきをなさず唯信佛の因縁よまかせて偏に他力をたのみて往  
生をうるなり爰に還愚痴と仰せらるゝも唯是れ穿鑿の上の沙汰  
なり淨土門眞實の教へならば還なんぞ云に心をは著べからず唯  
彌陀の本願をいいて六識縱横自然悟未籍思量一念功にして愚  
痴闇鈍の身ながら往生するすと深く信を發して御念佛を申さる  
る事專要たるものをやと云云○三には正しく念佛の正機を示す

尼入道の無智のともゆらにをなしふして

◎尼とは女の僧になりたるを云なり沙彌尼のときは五戒を持た



別やすし然れとも何れを豆何れを麥と云ぞと其差別をしらざるをろかなる者なり今念佛の正機と云ふも唯如是愚痴なるを以て正機とせるなり其故は少しなりとも私の智慧才覺をいたすときよハ本願相應一あらず還りて往生のさへりとなるなり能々心得らるべきものなり○四より正く智解を生ずるを遮するなり

語

智者のふるまひせずして

ふるまひとは行跡と書す行者外にかひつくらふ威儀を云なり一家大師の不得外現賢善精進之相内懷虚假の釋のころろばえなりたどひ内一眞實の智ありと云ともすて、外一其の相をあらはす事なかれ元より内智なふして外相に其ふるまひを見する事大なる謬のいたりなり◎問ふ愚癡は是れ衆病の本障道の源なり智慧は是れ多解を生じ聖道を證するの基なりとしかるに偏に智慧をす

七  
愚癡は是障道の  
本なり何と  
淨土の正機と  
するやの問答  
決疑

て、愚癡を專とせるを出離得道のためには大なる過失にあらざるや答ふ智慧を以て眞理といたらんと欲するとはなれた難し其故ハ老子なんどにも智慧出有大偽と云て少の智慧ある者此の智慧を以て便として仁義を行ふときは是の智よりいつはりしけく起りもの、乱れ是よりはじまるといへる俗典なんどにも小智小慧を以て還て仁義を行ふのさはりなりと云へり孔子の曰く聰明聖智守之以愚といへり世俗の教も道を行はんとするには智慧をいたさず愚痴を守るといへり何し況や佛教不可思議の境界智慧分別の商量の及ぶところよあらざるものなり今世間よを以て智解學道の人を見るに凡て二種あり一は己がために二には人のためよす初に己れかためよするとは人あつて佛道よころぞと生死をはなれ涅槃を證せんと欲してたまねく師をたづねて法を乞廣く諸經を讀誦し多く經教を理の沙汰し明かよ佛意をしり

是を以て助けとして理にいたらんと欲するなり然といへども凡  
 智の分齊として何を眞源にいたる事を得んやたとへば人あつて  
 地中一寶ありと知りて利なる鑿を以て地をほるに地中一石あり  
 大石あり又是を鑿を以やうやくほり行に底にいたりて金剛  
 と云て堅ものあり爰を以て鋤くたく事かまはずしてむをしく  
 すぎぬ利鑿をは多聞廣學の智慧にたとへ小石は見思の煩惱にた  
 とへ大石をば塵沙の惑にたとへ金剛をば無明よたとへり見思塵  
 沙は空假の二觀を以て能く破すといへども金剛の無明を破す  
 る事あたはず中道觀にて破すなりと天台の玉へりされば中道  
 のところの智をはなるを云なり天台に因望中道智還成妄とい  
 へる此意なり◎阿難も多智多聞なりといへども道力全からざる  
 故に摩登伽女が姪室にをちいるといへり或とき阿難乞食し玉へ  
 るよ姪室の内に行く彼摩登伽女と云あり是れ婆毘迦羅が先梵

- 見思とは 空觀
- 塵沙とは 假觀
- 無明とは 中道觀
- 中道のところ

中道智の時には前の空假二智よりへりて所破の妄法となるをいふは云云

八 阿難摩登伽女の難にあへる

天の咒を習ひ得たり此呪を以幻術をなすなりとき摩登伽女阿  
 難を見て其執ををこし此の咒術を以て阿難を室内に呼入てす  
 戒体を破らんとせしとき如來此の事をしらしめして食齋を  
 へりてすすにかへり玉んとし玉へるとき國王大臣長者居士  
 等俱來りて佛にしがひて御說法を聽聞せん事をねがふ千時  
 世尊頂より光明を放ち光明の中一千葉の寶蓮華を出生し玉へり  
 此の寶蓮華即ち佛の化身となつて結跏趺坐して佛の大神呪を宣  
 説して其の咒の神力不可思議なる事をあらはして文殊師利に勅  
 命し玉はく汝ら摩登伽女が室内に往て此の不可思議の神呪を以  
 て彼れが惡咒を消滅して阿難及ひ摩登伽女を將來れとの玉へり文  
 殊佛勅のごとくし姪室にいでりて彼れが惡咒を消滅して二人とも  
 にひさい歸來れり阿難佛を頂禮して悲泣し懺悔して云我れ無始  
 より以來多智多聞なりといへども道力全たく具せざるを以の故

●多智かへつて

此因縁にては智が邪冤  
になりしと見えがたし  
云云

九 般特羅漢果を  
證するの縁

今ま此の過慢くわまん一あへりとなり 已上首 是れ即ち多智かへつて慢  
經に出  
となるの謂をや若し又愚癡なりといへども一句の要を解すると  
きばなの樂特がをろかなるも羅漢果を證するといへり◎いしる奴  
僕に二子あり長子に家をゆづる一兄父の家をつがす家事を以て  
弟一付屬して自みの佛弟子となり出家學道して久しからざる一即  
ち羅漢果を得たりき弟の般特是れをうらやましく思ひ俗をいと  
ひすて、兄のところにて往て出家をもとめり即ち兄許して出家せ  
しむ兄教るに一偈を以てせり四月まで教れども覺得す前を覺ゆ  
れば後をわすれ後を覺ゆれば前をわする兄大に呵責して云此の  
人よをいて佛法に縁なし家にかへりて俗になれと云て袈裟を剝  
とりて門より逐出せり般特門外にあつて家よかへらず己れが  
愚かなるをかなしみて啼哭し立てり爾時に佛け彼か啼事を見玉  
ひて是をあはれみ即ち神力を以て彼れか誦するところの偈頌を

●一偈とは  
守口攝意身莫犯  
如是行者得度世

十 智解あやまり  
て眞ならざる  
は後身に又憂  
の證

以轉じて教へて掃箒の二字をとつて以て誦せしむ此とき掃箒を  
誦し得れば箒をわすれ箒を誦し得れば掃をわするなり今ま掃箒  
とい掃いはらふなり箒ははきぎなり即ちはきを以て塵垢を  
掃ひ除くなり是によつて世に除垢般特と云り忽ち一般特思念  
すらく何者か是れ除何に者か是れ垢なる垢と云の灰土瓦石なり  
除と云は塵土をはらふ故一清淨なるを云ふなり世尊是れを以て  
我一教へ玉へる事ハ此身及ひ身内の煩惱等は是垢なり今ま此の  
垢業を除けば清淨なりと此の念をなすときに忽ち阿羅漢果を得  
たりきと 法句經阿舍經  
善見論等に出 此れ即ち愚痴によつて證果を得る一あらず  
や◎若し又智解によつて坐禪工夫すといへども眞の解了一あら  
ざるときは宿債にかへりて輪廻のまぬかれざるなり昔けいし京師に  
詰老と云者あり坐禪精苦すると四十年の間ねむらざるなり或と  
き化坐せしとき一紙子衾もともに焚は其中一舍利を出す此の者



後、大富貴の家、生じて身ををりるまで憂悲苦惱をうくるなり  
 或は戒禪師の後身の蘇子瞻となり、青草堂の後身の曾魯直となり  
 乘禪師の韓氏が子となり、善旻の董司が女となり、海印は朱防禦な  
 る等皆な智慧を以高々と思ひ修すれども解智の誤りを以て還つ  
 て流轉の縁となるなりたとへば、學智を高くつゝのり反りて誤ると  
 き、畫虎不成反類狗といへるがごとく、凡智のなすところ何を眞  
 のさととりとならんや、次は他人のため、智をいたし佛道を學する  
 とは、是は四法師の品類あり◎一には多聞辯慧にして言語を巧に  
 なし能く諸法を説て人の心を展轉せしめ自己にをいては心所説  
 の法のごとくならず自行正しからずたとへば太虚は雲霧、慧は雷  
 霹靂すといへども、雨ふるをなきがごとし、譬説の意は多智多聞を  
 以て雲にたとへ説法をば雷のごとくくられたとへ慈行をは雨にた  
 とふるなり、二には廣學多聞にして智慧ありといへども、訥口塞吃  
 自行の慈行

一十 四法師の品類

慈行の自行

にして其の詞つたなく巧方便をめぐらす事なし故に其の理をば  
 知るといへども法寶藏をあらはす事あたはざるなり、是は雷はな  
 しといへども雲あつて小雨あるは譬ふるなり、三には廣く學問す  
 ると云事もなく又智慧もなく教法を宣説する事あたはず又又好  
 行をなす事もなし、是を弊法師なりと云て慚愧の心なき僧なりた  
 とへば小雲あつて雷雨ありをうにしてつゝぬに雷雨なきがごとし  
 四には多く言語をたくみにし能く諸法を説て人の心を轉して法  
 を行し其心正くして畏るゝところなしたとへば大雲は雲九たびさ  
 雷なり大車軸の雨をふらして万物よそ、ぐがごとしといへり  
 智度論に 是れ等は名聞利養を先として眞實の相なきなりたとひ  
 出たり 又眞實の智慧ありと云ども異縁對境にふれて眞理にいたる事か  
 たし皆な是れ有教無實有教無人をさし、いへり聖道すでに爾なり  
 何れ況や彌陀超世の別願の十方の諸佛も不可思議なりとの玉ひ

●薩埵とは、菩提薩埵の略なり、菩提薩埵は覺有情と譯す

六通とは、天眼、天耳、他心、宿命、漏、身如意、通

二十三輩往生の差降

語

無上大利の功德のみはめ玉へり十聖三賢の因位の薩埵不足の智を以て彌陀果徳の内證あへて解知し得事あらんや唯願ハ一切の往生極樂を心がけ玉へるともがら少しなりとも智解思量を出す事なかれ唯上に彌陀を尊み本願他力を信して臨終の夕を待ち佛聖衆の來迎引接よつて目出度往生をどけて常ニ彌陀の説法を聽聞し上善極位の菩薩と常ニ一處に會坐して深法の極理を談じ六通自在の妙用をふるまひ永生の大快樂をうけんと存せらる事是にすぎたる覺悟はあるまじなりと云云  
○五には正しく結して念佛の用を勧め玉へり  
た、一向に念佛すべし  
◎是れ即ち淨土門の極要なり其故ハ凡夫往生を沙汰せられ玉ふに佛け上中下の三輩ニわけて諸機を定め玉へり其の上輩を云と

●無上菩提心を發す事あたはすといへども此語「功徳を修する」と能はずと雖無上菩提の心を發しては經文にいはし然らざれば經文にいはす

きよは家を捨て欲をすて然も沙門となり菩提心を發して此諸の功德を修して以て淨土ニ廻向して極樂國土に往生せんと願ふなり中輩と云は上輩の機のごとく捨家棄欲し行して沙門となり大ニ無上菩提心を發す事あたはずといへども齋戒を持ち塔婆を起て佛像を造立し沙門に飲食を以て供養し又絹をかけ燈をとほし華をちらし香をたきて以て佛を供養し恭敬せり此れ等の功德を以て廻向して淨土に往生せんと願へるなりさて下輩の者は中輩のごときの諸功德を修するにあらずといへども菩提心を發して以て是を廻向して淨土ニ往生せんと願求するなり今三輩を説て諸機を度し玉ふといへども實は是れ廢捨の行と云てすて、用ず一向專念無量壽佛と云て一向ニ念佛するを以てなり是の意によつて此法語の誥勸に一向に念佛すべしとの玉へり  
具には、され選擇  
は一向とハ一つは向ふと云て諸佛諸善の法に心をかけず唯一筋

三十 天竺三種の寺

彌陀一佛に向ひ諸善の方より心をかけざるを云なり◎例して是をいはゞ五天竺國中に其寺はなはた多しといへども都て是を云ふに三種の寺の外はなし一は一向大乘寺此の寺の中は偏一大乘のみを修行して小乗を學する事なり爰は文殊菩薩を以て上坐とするなり是は至極大乘の菩薩なるを以の故なり二は一向小乘寺此の寺の中はひたすら小乗の法のみを修して大乘實相の理會て習學する事なし是には賓頭盧を以て上坐とするなり是は唯小乘聲聞の尊者たる故なり三は大小兼行寺此の寺に大小乗の法兼學するなり爰を以て兼行寺と云なり是は文殊と賓頭盧とをならべて上坐とするなり方よしるべし大乘小乗の兩寺には一向の言はあり兼行寺に一向の言なし今の一向と云も亦爾なり念佛の外に更し餘行なきなり若し自餘の諸行をならべ修するときはに彼をも取得す是をも修得す兩楹の間より立て成立

四十 申明が忠孝

する事あたはず唯一向よりあらずんば成しがたし賢臣二君につかへず貞女二夫をならべずといへる先言是を耳にあるをや◎昔楚の惠王天下の主たるときより兄の子に白公と云あり惠王の姪なり乱ををこして惠王よりたがはず惠王是を伐とし玉へとも白公威勢つよくして容易對治しがたし于時惠王の玉はく朕聞忠臣は必ず孝子の門より出ると云ふ若し天下より孝子のものあらば尋もとめて大將軍として白公を攻伐し何の難事かあらんとありしかは左右の臣下奏して申さく我れ等うけたまはるに申明と云者あり父よりつかうまつりて極めて孝をつくせりと云惠王大よりよること人をつかはして是を迎呼しめ玉ふに申明か云く我れ聞く孝子の忠臣ならずと我れ今ま家にあつて父につかへて且暮にはなる、事なら豈更に父をそむいて君につかうまつる事をせんと云て固辭して以て王命に應せざるなり然るに惠王再三よをよん

て召呼玉へども更し領納せずして往事なし此とき父申明し謂て云く汝ち何を王命にしたがふて國を安く平らけて名を萬代し擧ざるぞやたどひ汝ち爰を立去行くとも吾ハ必ず死する事あらじと申明父の語を聞て遂に去て惠王の許にいたる王申明か來るを見て大に悦び拜して驃騎將軍となして群兵を主領せしめて白公を攻しめ玉ふに白公即ち申明が大將となりて攻來る事を聞彼れと防戦かふべき事のあたはざるを思ひて左右の臣に謂て云く申明か父を縛り來りて我か前しをけと白公のいへることく父をしはり取て白公の軍中しをくなりときに申明諸兵を引て攻め至るし及んで白公申明し語て云く汝が父すでに縛りて此方の軍中にありぬ汝ち今ま我れと共に和睦せずんば今ま汝が父を殺さんと申明是れを聞て進退こゝしきへまりぬ然ども白公し謂つて云く我れ聞く忠と孝との二つ並行なふ事なし我れ今ま君の俸祿を食

五十  
 一向とは西方  
 の一土を願求  
 するに亡羊の  
 例准鶴に向ふ  
 のたとへ

なり豈君の命にそむいて父し事ふる事をせんや父にをいて汝が殺しまかすと云て即ち一心一向し鼓をならし軍ををこして白公が諸軍を攻ほろぼし白公をからめとりて楚の惠王にまみえしむるなり王大し悦こび玉へりつるに父は白公がために斬れぬ惠王是を聞て白公を殺せりさて申明が父をば收とりて是を禮葬し玉へり申明大し歎て云く我れ國を定る功ありといへども父を害せるの耻ありと云て遂し自刎て死せりと千字文の註に出此れ即ち二心を取て二つながら行なひをさむる事あたはじ世間をを爾なり何に況や一大事の法門しをいて一向にあらすしく成就する事あらんや故に云ふ單妄愚昧の凡夫直入報土の安心一向專念の行法しあらずして何る此度の往生極樂の本意を遂んや唯私くしの了簡を止て教のごとく信じ玉ふ事第一の最要なりと云云◎又珍海の決定往生集に云一向信者唯以西方爲一期要一切所修悉以歸之名



り於中三界にとゞまり出離のためのきづなとなるハ疑情の一つなり料思ふ諸佛出世も三界の衆生を出離せしめんとのためなり今ま此の法語に厭離穢土欣求淨土の安心をすゝめ玉へるも疑心をはなれて淨土に往生せしめんと然りといへども衆生あやまつて疑を生せんを恐しめ玉ふ故に證誠のために兩手を以て印判し其の虚妄の教化にあらざる事を表し玉へるなり◎淨土宗と云ふ聖道諸宗に對するの言はなり古來の傳ふ云從凡至聖名為聖道從穢至淨稱曰淨土されは聖道は此土にをいて聖人あつて佛道を修行し得果し玉へる宗なるが故に以て名とし玉へり淨土は凡聖賢愚を論せず道俗男女をえらはず唯ひとへに三界は是れ穢なり苦なり樂ふべき處なし故に大に厭ひすて、更にもとむる事なく専ら往生淨土を以て所期とせり故に淨土宗と云なりさて宗名を立る事自他以て同し其のこゝろいかんぞと云ふ宗は尊な

六十 淨土宗名の辨述

●陀羅尼とは呪也譯す諸佛秘密の神呪也

七十 宗の三義并細釋

り主なり要なりなんぞ註して其の家々にをいて所依の經中に主とし尊ふところを以て宗旨とするなり例せば涅槃經のときんバ常住佛性を以つて宗とし維摩經のときは不思議解脱を以て宗とし大般若經のときは空慧を以て宗とし大集經のときは陀羅尼を以て要とし玉へる等なり今ま淨土門のとき念佛三昧を以て尊重し主要とせるなり◎是に付て戒度の聞持記に三義を以て宗主の義を釋し玉へり一には念佛は是獨尊の義なりたとへば天に二つの日なく國に二たりの王なきがごとく諸善万行の中に念佛獨尊ときなり二つに念佛は是れ統攝の義なりといへり統攝とはすべをさむると訓してたとへば網の大綱を引くとき諸の綱の目一同にうごくがごとく又裘の領を引あぐればもろく皆あがるが如くなり此れ即ち大綱と領ともろくをすべをさむるを以ての故なり今ま念佛三昧も亦爾なり此の一

行にをいて諸善万行ことくくうできしるゝなり三は念佛の  
 是れ歸趣の義なり歸趣とは二字共にをむくと訓す例せば星の  
 必ず北にむかひ水の必ず東にをむきをさまるごとくといへり  
 謂く星に北斗七星と云あり一には貪狼星二には巨門星三は祿  
 存星四は文曲星五は廉貞星六には武曲星七は破軍星なり  
 此の七星のかたはらに妙見星と云あり此の星衆星の王たり故に  
 諸の星ことくく妙見星の方に向ふてうやまふなり又水は必ず  
 東にあつまると云ふ是は眞丹の法をとれり昔女媧氏五色の石を  
 練て以て天の闕たるを補つてくろへりさて大なる海龜の足  
 を斷て四方の柱とし玉へり其の後共工氏と顛頊氏と天下をあら  
 そひ帝たらん事を欲せり其とき顛頊氏いかつて不周山に觸し  
 め玉へは天柱をれ地維絶たり此ときをいて天は西北の方にか  
 たむき倒れて日月星辰は是につきてあり地は東南の方崩て低な

●五種正行  
 禮釋觀讀  
 嘆供養名拜察誦  
 正行

りぬ故に百川萬流ことくく東に歸あつまるなり已上列子に見たり今も  
 亦爾なり念佛の一行には諸善万行残すをさまりあつまるなり平  
 等覺經に云阿字十方佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖教皆是阿彌  
 陀佛已上即今の意ろなり廣く云ふときは念佛に無量の徳用尊極  
 の義ありといへども都て云ふは戒度師三義よせて念佛尊主の  
 義を釋せり今ま淨土門に此の念佛を以て宗とす故に淨土宗と云  
 なり安心起行といふ安とは古來二義なり一は安に置なり謂く一  
 度本願念佛のことりを聞て餘念をめぐらさず心を西方極樂の  
 一土よをくを云なり一には安は定なり一心に極樂淨土をもとめ  
 一心に彌陀に歸依し一心に南無阿彌陀佛の一行よとづいて此  
 の三ツを思ひ定むるを安心と云なり起行とは起心立行と云て心  
 ををこし行を立つるに其の様々あり就夫正行あり雜行あり正行  
 と純一無雜にして西方彌陀の行法なり是に五種正行あり雜行

●五種雜行とは  
前正行の反對を云ふ  
●淨土義とは  
丁上人の願義なるべし

とは是はこれ極樂淨土の行にあらず人天及び聲聞緣覺菩薩を通じ亦十方淨土に通ずるの諸行をさして雜行と云なり是にまた五種雜行あり已上安心起行の名義其相はなれた廣ふして倉卒爰につくしがたし具に淨土義の中に見ゆたり須んとをいん人は彼に往て知るべし但し文の繁多なるを以てををるゝ事なかれ今ま此の一紙の法語の中に安心も起行も其の外淨土の教相ことくく載をなへり故に此外に別義を存せずとの玉へるなり然れども我滅度の後此法語のをこえ餘りに易行易修の大善たるを見て別解別行のともがらあつて還つて異執邪見ををこして念佛誹謗の罪をつくらん若し造罪の者あらば此のあやまりによつて惡趣に墮在せん然るときは此の一紙の法語墮獄の因縁たらん事ををそれ玉ふ故に兩手印を以て誓詞のまことを表し玉へるなり因て上人あらかじめて未來をかながへて記し玉へる事鏡をか

八十 選擇破文の數種の書

●大原問答云云  
所論宗論の如きもの問答は是非の後世に物語なり

けて明かなるものをや其の故は上人在生のときに念佛誹謗のありき◎三井寺の公胤僧正常上人のすゝめ玉へる專修念佛の法をうねみてそしりをなせる人なり故に大原問答のときも百有餘人を招つて来て問答せし人なり或とき公胤選擇集を見て大よろたがひを生じ淨土決疑鈔と云ふ三卷の書をつくりて選擇集を破せしなりさて上人源御往生あつて四十九日の御法會を御弟子達つとめられしとき公胤使をつかへして云此のたびの導師は我れを以し玉へと望しなり諸弟子達あやしみいなるゝやうは日來上人をそしる者なり今更何事に導師を望るゝやと然れども兼ての謗心をひるがへされ懺悔の思ある事も候はんの間た請待せよと云て應諾せり其日四十九日のぞんで僧正自種種の供物を持來して云我れ年來上人をそしる事其の罪のがれがたし今ま尊靈前として前非を悔ためなりと云て即ち廟堂にまうでゝ



●不共の極談と  
は  
本願他力は他の聖道と  
共同せざるが故なり  
立歩の教なるか故なり

懺悔し御弟子となりたてまつるとして師弟のまことを致せしなり  
又梅尾明慧上人も源空上人御往生の次の年に選擇集を見て大に  
あやまりて摧邪輪三卷と莊嚴記一卷とをつくりて於中十六の難  
破をなせり皆な是れ自力聖道の見よりをこりて本願他力の不共  
の極談をしらざるよりなせるところなり故に其の破一つとして  
あたる事なし又上人滅後十餘年すきて嘉祿年中上野の國並櫻  
堅者定照と云もの叡山よのぼり弘通念佛をねたみ彈選擇と云選  
擇破文の書を作て隆寛律師のもとよをくるに律師即ち顯選擇と  
云をつくりて返答し玉へり其言は云く汝僻破不當如暗天飛礫  
已上此の外上人滅後に念佛誹謗のともがら甚た以て多しまこと  
に先車のくつがへるを見て後車の誠となる上來上人を破難し念  
佛をそしるの輩是れありといへども皆な是れ虛妄邪見よりをこ  
りて佛意の素意にあらず故に邪はいよく邪ししてをどろへ行

正はいよく正にして本願念佛の法門さかんなる事目よふれて  
いちじるき者をや唯信を先きとして祖意に相違背し玉はざらん  
事第一の要たりと云云

九十 稱名勸化の結

◎敬て一切の念佛往生人等にまうさく此の度生死流轉の闇澤を  
出て無爲涅槃の寶城よ入らんと欲すること淨土門にしく事  
なし今ま淨土門の教を聞に二つあり謂く正行と雜行となり正雜  
二行の中よを以て雜行をばなけうつて正行よ歸すべし正行の中  
に助業あり正業あり二業の中に助業をば傍にして選で正定業を  
專とすべし其の正定業と云は即ち是れ南無阿彌陀佛を稱を云な  
り此の御名をとをふるものは必ず極樂國土よ往生する事を得な  
り何を以の故に稱名念佛は是れ本願の正因たるを以ての故なり  
然りといへとも稱佛名に多種あり或は富貴財用のために稱名し  
或は延年轉壽のためよ稱名し又は苦難又ハ訴等の厄災をはら

●瀉瓶とは  
一器の水を一器に移す  
か加く師資相傳一點の  
違ひなき云ふ

十二

毫述の頌

んと欲するの稱名の品々あり是れ等は是今の所勸のかきりにあ  
らす三國相傳の御すゝめの念佛と云ハ二尊三佛の御教化またか  
ハす信佛の因縁に順して私の了簡をめぐらさず自餘ハ心をちら  
さす偏に西方の一土彌陀一佛と目かけて申す念佛の外には亦な  
く候なり如是相傳ハ元彌陀の本願よりをこりて三國の佛祖瀉瓶  
異途なくうけつたてて今日ハいたる今ま空上人の一紙の法語に  
佛陀に盟誓をたて、書のこと玉へる御すゝめ本願正因の念佛を  
りまことに是れ掌をさすの明證誰人か疑ををこと信受の心なか  
らんや何に況や上人は是善導大師より直ニ淨土の法門を傳受し  
玉へり於呼傳受とは何者ぞや豈是他あらんや唯往生極樂のため  
ハ南無阿彌陀佛と申てうたがひなく往生するぞと思ひとりて  
申す外には別の子細候はずと云云  
◎若日貞享乙丑晩冬に筆を起同く丙寅の甫春に製述の功をいり

此書は通俗を旨とせら  
れし故にや、御遺誓の  
御遺誓たるころ、未  
だ充分に願はれざる所  
あるが如し、審に之を  
知らんと思ふ人は、更  
に忍微上人の諺論、關  
通上人の梗概開書、法  
洲上人の講説等を披き  
玉ふべし  
上來心付きしに隨ひ、  
慈に略註を下し、剩へ  
妄評を加へたり、誤謬  
定めて多からん、見ん  
人之を正し玉へ

て筆を絶て 隠凡 假寐す 忽に神人來て告曰く阿彌陀佛の四字  
の洪名の万徳の歸するところなり今ま汝にすゝむ阿彌陀佛と横  
行に書して是を句の上ニ冠しめて懷意を述よ先づ阿師の法語を  
以せよとの玉へり夢中以後の句を繼と云と覺て睡起す予從來著  
述の道にくらし何を一偈を全せん然りとはいへとも神夢の貴命に  
まかせて短慮輕才を懷す俚語を加追して一絶を綴て云爾

頌曰

阿師法語最高哉  
彌滿乾坤一紙開  
陀若晚生寧所揣  
佛情祖意愧不才

洛下隱士 貞 阿

一枚起請文鼓吹第五卷終

明治廿八年四月三十日印刷  
同 年五月十六日發行

正價金參拾錢

發行所

東京市牛込區喜久井町  
教報社書籍店

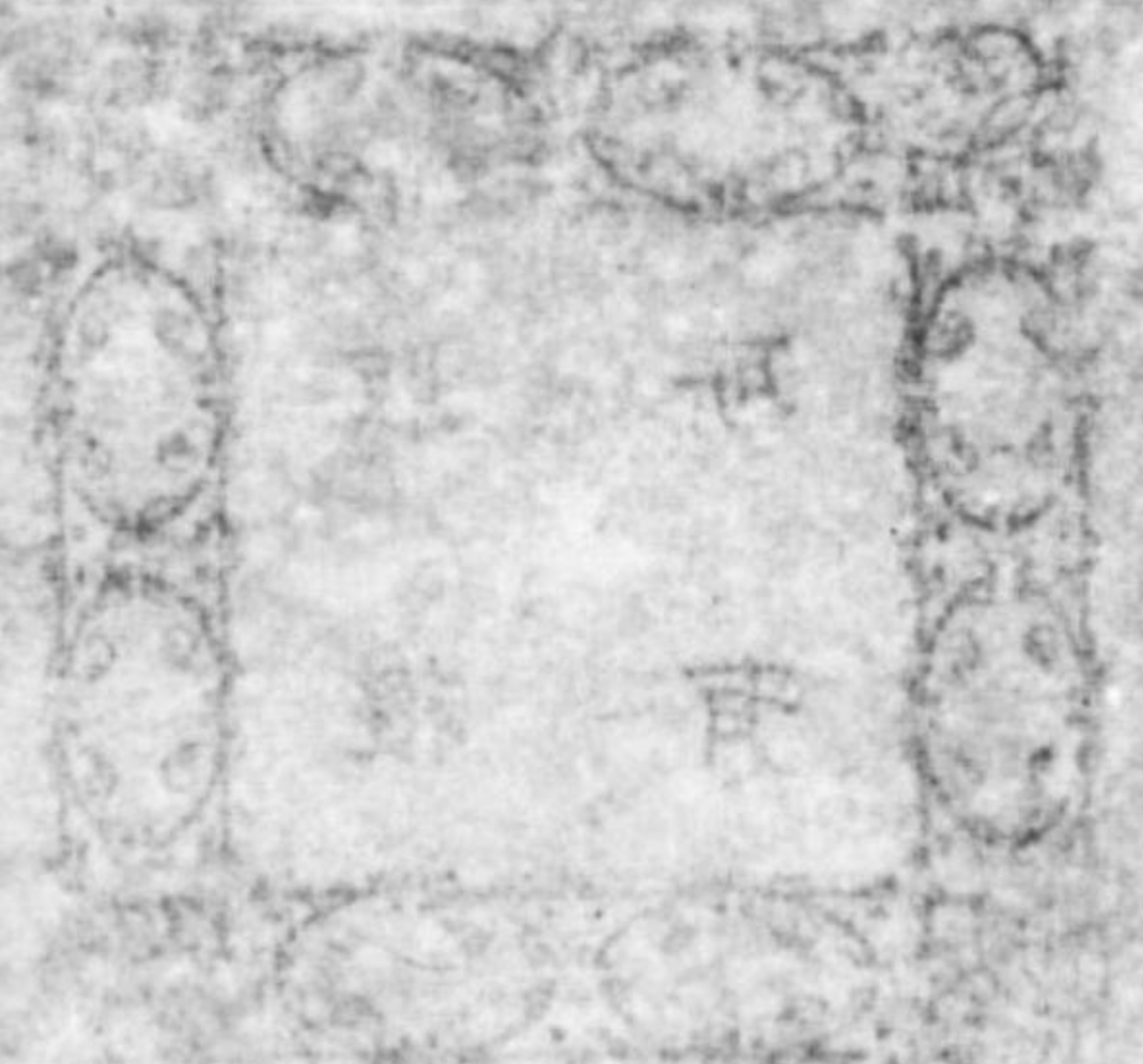
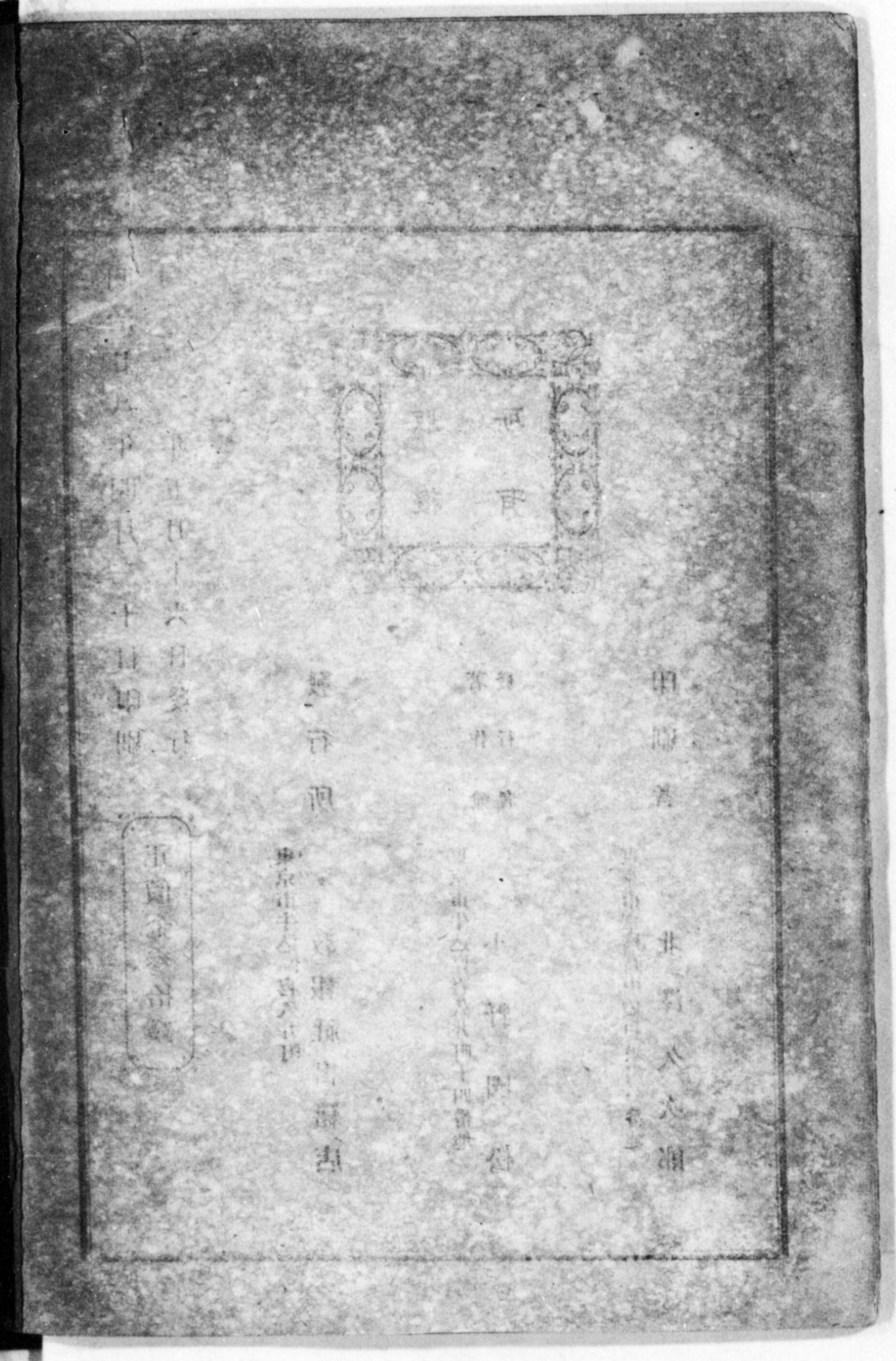
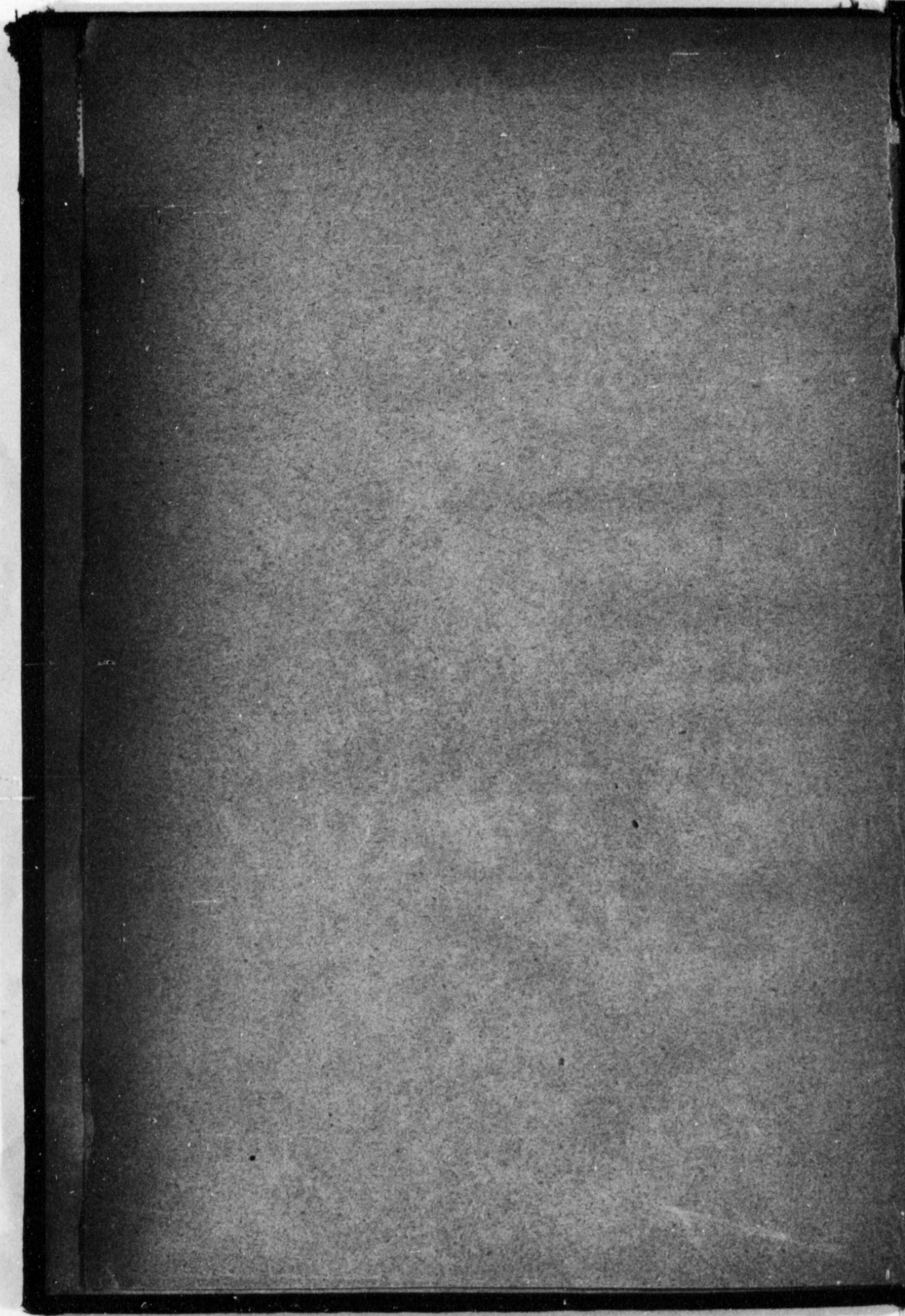
著者  
發行者

東京市牛込區喜久井町十四番地  
小野國松

印刷者

東京市京橋區中橋和泉町一番地  
北澤久次郎

版權  
所有



正德十六年  
十月  
十日

卷一

卷二

卷三

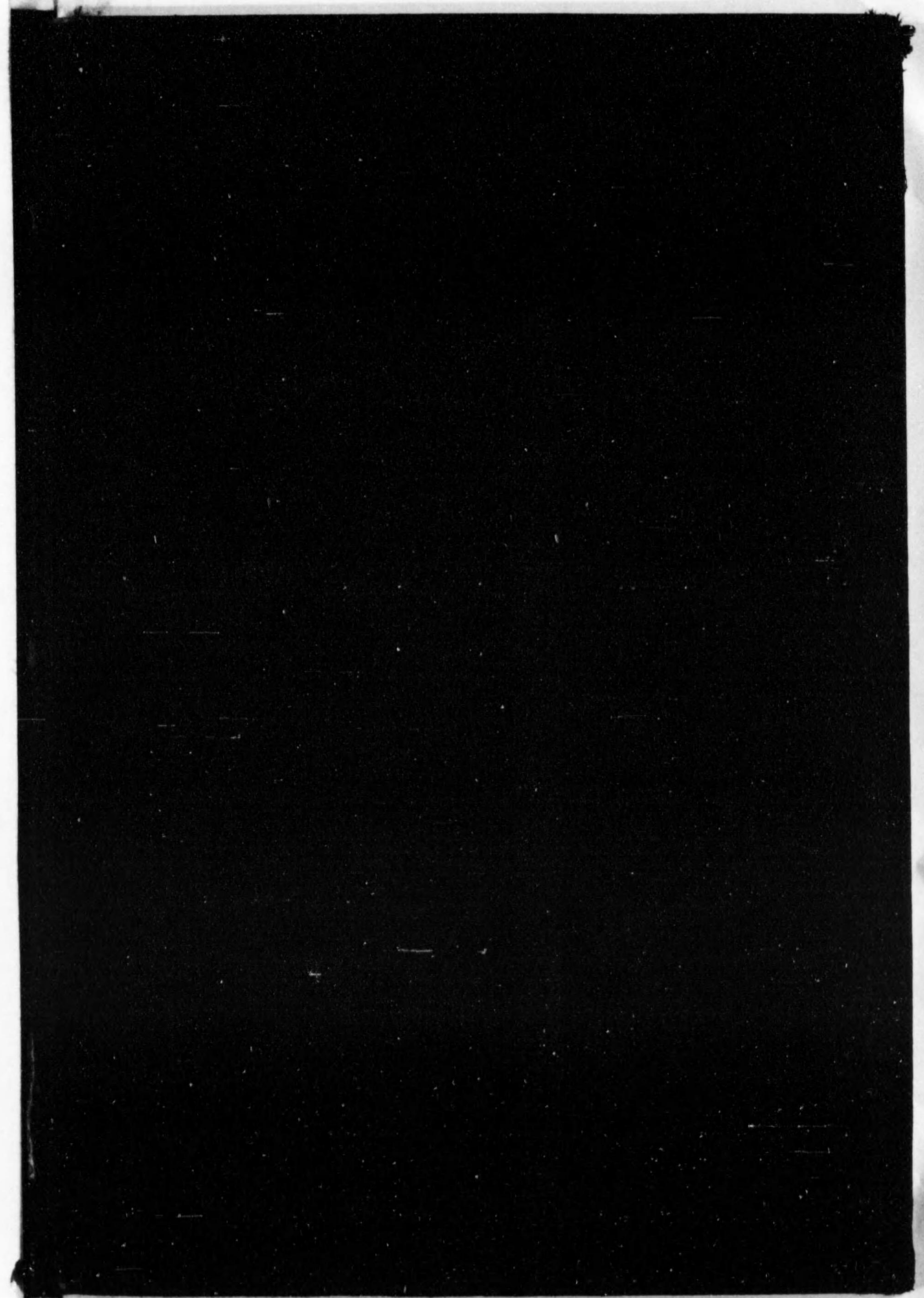
五

正德十六年  
十月十日

卷一  
卷二  
卷三

卷四  
卷五  
卷六

46  
175



175

017380-000-4

45-175

一枚起請文鼓吹(冠註)

雲說/著

M28.5

ABF-0074



